

つくったリズムの重なりを試しながら、お気に入りの重ね方を見付ける子ども

— 小学2年「リズムをつくってかさねて歌おう～音楽づくり～」の実践から —

1 題材のねらい

石橋町のお店探検で見付けたものや音から言葉を選び、リズムを付けて表現する活動に関心を持ち、反復や問いと答えなどの音楽の仕組みを手がかりにして音楽をつくっていくおもしろさを感じ取ったり、リズムの重なりのおもしろさに気付いたりしながら曲をつくることことができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえ

本学級の子どもたちは、リズム遊びが大好きである。2年生のこれまでの活動では、4分音符と4分休符を組み合わせて様々なリズムをつくる活動をした。1年生の時に「たん たん たん うん」と表していたリズムが「♪♪♪♪」と表せることを知り、4分音符と4分休符のカードを並べていろいろなリズムをつくることできるようになった。また、並んだカードを見ながらリズムを表現できるようになってきている。以下に示すふりかえりは、題材「リズムあそびをしよう」で、4分音符と4分休符のカードを4枚組み合わせてつくったリズムを、グループでつなげて表現した時間の後に書かれたものである。

今日、音がくをしたよ。4分音ぶのカードと4分休ふのカードを4まいえらんで、リズムをつくったよ。わたしはさいしょ、「たん たん うん たん」をつくっていたけど、ちょっとかえて「うん たん たん たん」にしてみたよ。グループでつなげてみた時、みんなのリズムがぜんぶちがっておもしろかったです。ほかのグループのもやってみたら、むずかしいのがあったよ。でも、もっとむずかしいリズムもつくってみたいな。あと、8まいぜんぶつかってリズムをつくってみたいです。
(児童A)

児童Aのように、子どもたちにもっと難しいリズムを音符や休符で表してみたい、もっと難しいリズムも音符や休符を見ただけで表現できるようになりたいという追求意欲をもって活動に取り組もうとする姿が見られたことから、8分音符や8分休符を取り入れたリズムの表現を取り入れてきた。さらに、子どもたちは、自分たちがつくったリズムに、曜日や数などの順序性のある言葉を付けて表現する遊びを考え、リズム遊びを楽しんできている。つくったリズムそのものを表現する楽しさはもちろんのこと、ひと工夫加えてリズム表現を楽しもうとする子どもたちである。このように、リズムから音楽をつくっていこう、できた音楽をつなげていこうという意欲をもち、みんなで一斉に同じリズムを表現することの楽しさを十分に感じ取ってきている子どもたちが、表現への追求意欲を持続し、満足のできるような音楽づくりの活動を行うためには、一つのリズムを一斉に表現するのではなく、別々のリズムを重ねて同時に表現するという新たな表現方法を取り入れることが不可欠であると考え。そしてそれは、子どもたちが低学年の段階で音楽をつくっていくことの喜びやおもしろさといったものを存分に感じ取っていく姿を目指すために必要であると考えている。

(2) 本題材において求めたい姿とそのための手立て

本題材は、学習指導要領のA表現(3)イ「音を音楽にしていくことを楽しみながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること。」に関連させながら学習を進める。

題材を生活科の内容と関連させ、町探検で出かけた石橋町のお店で感じ取った音や様子を基に音

楽づくりをする。本校に隣接する石橋町は、パン屋や醤油屋、蕎麦屋など子どもたちにとって音や様子を想起しやすく、擬音語や擬態語によるリズムづくりの素材となるお店が数多くある。同じお店に行ったグループの仲間と共通体験を基に音楽をつくり、できた音楽をお店の人に聞いてもらう活動を設定することで、子どもたちの目的意識の醸成へとつなげられる。また、新たな表現方法として、二つの異なるリズムを重ねるという方法を取り入れる。そのおもしろさを感じ取るためには、一人一人が拍の流れにのって表現することを自然に求められるようになることから、拍感を育てていく機会とすることもできるであろう。以上のことから、音の重なりのある音楽づくりを、石橋町のお店を題材として取り組みたいと考えた。

本学校園音楽科では、「自己との対話」「他者との対話」「作品との対話」の三つの場面で生まれた問いを基に、「問いをもち、主体的に追求する姿」を目指している。本題材の音楽づくりの場面において、「自己との対話」では、自分の体験から選んだ言葉を使って自分なりのつくり方でリズムをつくっている姿、「他者との対話」では、友だちのつくったリズムを聴いて自分のつくったリズムとの違いやよさを感じ取ったり、友だちとリズムを重ねるという活動を通して感じ取ったことを伝えながらグループで試行錯誤したりしている姿、「作品との対話」では、つくったリズムをどの組み合わせで重ねると良いかを、リズムのいろいろな重なりを表現したり聴いたりしながら見付けていく姿を目指した。そしてまた、自分の思いに沿った音楽をつくっていき、という問いをもつことによって自らの音楽表現を高めていく姿を期待したい。

そのためまず、町探検に引率した教育実習生によるモデル演奏を聴かせることを出会いとして活動をスタートさせる。ここでは、子どもたちの中に「この音楽はどうなっているのだろう」「どうしたらつくれるのだろう」という問いがうまれるであろう。子どもたちと町探検の経験を共有した教育実習生は、体験と音楽づくりとをどのようにつなげ、どのような過程で音楽をつくっていったのか理解させることで、出来上がった音楽のイメージをもつことができるようにし、ゴールが見えるようにすることができる。また、演奏した音楽を既習の音符や休符を使って可視化しながら、反復や問いと答えなどの音楽の仕組みを示して音楽づくりのイメージを膨らませるようにする。

その後、4拍1小節の枠の中で選んだ言葉を使って、一人一人がリズムをつくる活動を設定する。リズムをつくる際の手助けになるように、これまでに学習活動で使用したことのある音符と休符のカードを用意しておき、並べ替えながら試せるようにしたり、自分なりの表記でつくったリズムを残せるように、ワークシートを用意したりする。

それから、一人一人がつくった言葉のリズムをグループの友だちと様々な組み合わせで重ねる活動を設定し、いろいろな重なりの中からお気に入りの重ね方を見付けられるようにする。二つのリズムを重ねて表現したり、聴いたりして感じ取ったことをグループの仲間と共有し、友だちとのかかわりの中で音楽づくりの試行錯誤を続けられるようにしたい。その際の支援として、どのリズムの重ね方が気に入ったのかをワークシートに書くことで、お店の音楽に入れるリズムの重ね方を決める時の手助けになるようにする。そして、たくさんの重ね方の中からグループで選んだお気に入りのリズムの重ね方をに入れて、モデルとなる音楽の仕組みを手がかりにしながら、一人一人がつくった言葉のリズムが一つの音楽につながっていく楽しさを感じられるようにする。

また、つくった音楽を録音して自分たちで聴けるようにしたり、グループ同士で曲を聴き合っただよさや違いを感じ取っていったりすることで、自分なりに感じたお店の様子を音楽に表現できたことの喜びや、友だちがつくった音楽のよさを感じられるようにしたい。出来上がったお店の音楽は、生活科の学習の中でお店の人に披露する機会を設け、子どもたちが自分たちの音楽づくりの価値を実感できる場ともなるようにしたい。

3 展開計画（全7時間）

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇追求する子どもの姿
1	1	○リズムが重なる音楽と出会う。 ・モデルとなる，教師がつくったあるお店の様子を表す歌の演奏を聴く。 ・どのように音楽をつくっていくのかを知る。	◇モデルとなる音楽からお店の様子を感じ取ったり，問いと答えや反復などの音楽の仕組みを見付けたりして，自分たちの音楽づくりにいかそうとしている。
	2	○自分の選んだ言葉を使ってリズムをつくる。 ・町探検で見付けたものや音から言葉を選んで，4拍1小節のリズムにのせて表現する。 ・グループの友だちと聴き合う。	◇町探検で見付けたり耳にしたりしたものや音を表す言葉を使って，既習の音符や休符を手がかりにしなが，自分でいろいろなリズムをつくろうとしている。
2	3・4	○リズムの重なりを楽しみながら，いろいろな重ね方を試してみる。 ・つくったリズムを友だちのつくったリズムと重ねて表現して，様々な重なりを楽しむ。 ・友だちとリズムを重ねたり，聴いたりしながらお気に入りの重ね方を見付けていく。	◇モデルの歌のように，自分のつくったリズムと友だちのつくったリズムを重ねながら楽しんでいる。 ◇リズムのいろいろな重ね方を感じ取り，そのおもしろさや気に入った重ね方を見付けている。
3	5・6 7	○ペアで重ねたリズムをグループでつなげて，お店の音楽をつくる。 ・どの組み合わせで音楽をつくるのかを決めて，グループで練習する。 ・つくったお店の音楽を録音して聴いたり，お互いに聴き合ったりする。 ・グループでつくったお店の音楽を発表する。	◇前時までに見付けたお気に入りの重ね方を出し合い，どのリズムを重ねるかをグループで試しなが表現している。

4 授業の実際

(1) リズムを重ねた音楽との出会い

子どもたちと町探検を共有した二人の教育実習生による「おとうふやさんの歌」を聴かせた。まずは，子どもたちがこれまでにつくって表現してきた音楽との違いを感じ取る姿を期待して，何を表した歌であるのかは伏せたまま聴かせることにした。子どもたちは初め，一人ずつで歌っている言葉とリズムのマッチングのおもしろさを感じて笑ったり，何を表した言葉とリズムなのかを考えながメモを取ったりしていた。ところが，子どもたちの手が止まり，教室が静まり返った瞬間があった。



図1：教育実習生の歌

それは，二人がそれまでつなげて歌っていたそれぞれのリズムを重ねて歌った瞬間である。子どもたちにとって，異なるリズムを重ねて歌った曲との初めての出会いの場面であった。

歌を聴いた後で，出てきたリズムと言葉を確認し，それが何を表していると感じたかを子どもたちに尋ねた。また，子どもたちの反応が変わった瞬間をとらえ，歌を聴いて気付いたことがあるかと尋ねた。子どもたちは，リズムを重ねた歌であることを感じ取り，「先生たちのリズムがかさなってた！」「先生たちの歌は今までとちがう！」と口々に声を上げ，『リズムを重ねる』という新しい表現を新鮮に感じていた様子であった。また，「こんなのどうやってつくれるのかなあ。」と，自らの中にうまれた問いをつぶやく子どもがいたことから，教育実習生が歌った音楽をどのようにしてつくっていったのかを示していった。具体的には，お豆腐屋さんで見えたものや仕事の様子，そこで実際に聞こえた音を基にした言葉でリズムをつくり，初めはつなげて，その後は重ねて，最後のリズムは二人で相談してつくったという過程を教育実習生が伝え，教師が音符カードなどを使っ

児童Cも児童Eも、お店で実際に耳にした音を再現するようリズムをつくりたいという思いをもって取り組んだことがわかる。単純に言葉を選んでリズムを付けるということではなく、自分が行ったお店の様子を伝えたいという願いが追求の姿勢につながったのであろう。また、児童Eは同じグループの友だちがつくるリズムが、どのような様子を表しているのかを感じて聴きたいと、関心をもっていることがわかる。その後、つくったリズムをグループで持ち寄り、リズムカードを見せて紹介しながら聴き合う活動を設定した。中には、同じ様子を表したもの（図4）もあったが、子どもたちはお互いのリズムの違いを見付けながら、どちらのよさも認め合い、楽しく聴き合う姿が見られた。そして、子どもたちは当然であるかのように、グループ全員のリズムをつなげて表現し、さらには、お店のことが分かるようにと順番にもこだわりをもって考えていた。

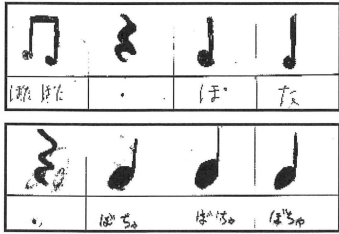


図4：お店のリズムカード
（もろみをしぼる様子）

(3) いろいろな重ね方を試してお気に入りの重ね方を見付ける

お店のグループは六名で構成した。それぞれがつくった六つのリズムから二つ選んで、全ての重ね方を試すと15通りの重ね方ができる。たくさんのおもしろさの中から、重なりのおもしろさを感じ取るための手立てとして、どこがおもしろいのかというポイントをもって聴くことができるようにした。まず、教師が「おとうふやさんの歌」から二つ、子どもたちがつくったリズムの中から二つ（ただし、異なるお店のもの）、合わせて四つの重ね方を選んで取り上げることで、重ね方のどこがおもしろいのかというポイントに子どもたちが気付けるようにした（図5）。次に、この四つのポイントを手がかりに、どの重ね方がおもしろいのか、どんなところがおもしろいのかを見付けていく活動を行った。

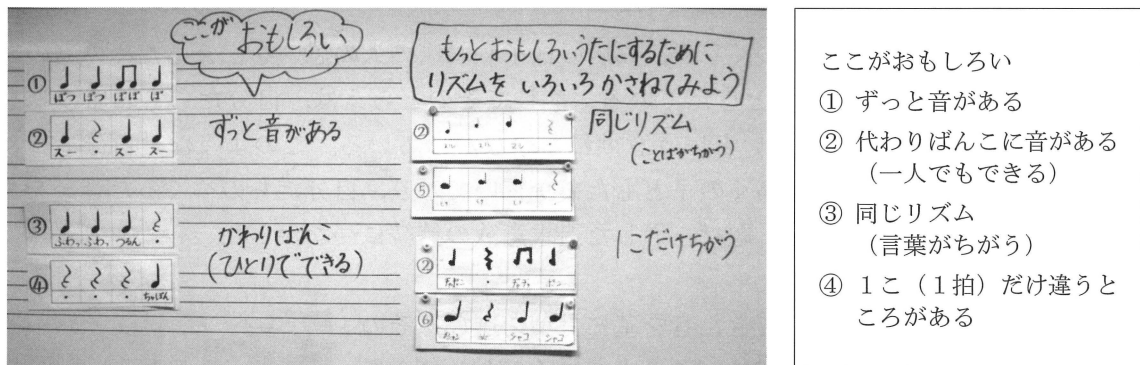


図5：子どもたちが気付いたリズムの重なりのおもしろさのポイント

子どもたちがリズムの重ね方を試す中で、教師がこのグループではこのおもしろさに注目するであろう、という予想をもってグループを回った。そして子どもたちに、どのおもしろさに当てはまるのかを確かめるようにはたらきかけた。その後、グループで見付けたリズムのおもしろい重ね方を全体の場で発表させ、全員で共有した。以下は、その際の授業記録である。

C 1：パン・エ・プールチームは、①と④です。（カードをみんなに見せる）

C 2：ああ、そういうことね。¹

T：見て分かったの？すごいなあ！^a どういうことかな。ちょっと聴いてみようか。

C 1：①と④を重ねたら、かわりばんこになっていて、重ねるとつながるからおもしろいと思いました。

C 3：一拍ずれただけ！

T：C 1さんとC 4さんでやってみてくれる？

C 1 C 4：（演奏）

C 5：うわっ！一人でもできるじゃん。²

T：かわりばんこになってて、一人でもできるからおもしろいだね。^b みんなでやってみよう。

子どもたちが見つけたリズムのおもしろい重ね方を発表した際には、リズムカードを提示させるようにした。すると、波線部1にあるように、リズムカードを見ただけで二つのリズムがどのように重なるのかが分かり、そのおもしろさの理由にも気付いている姿が見られた。また、実際に二つのリズムを重ねた演奏を聴くことで、波線部2にあるように、そのおもしろさを感じ取っている子どももあり、なんとなくおもしろい、というのではなく、リズムがこう重なるからおもしろいのだ、という根拠を子ども自身がはっきりともつことができていた。そして、下線部aのように、リズムカードを見ただけでどのように重なるのかが分かったことをとらえて褒める、下線部bのように、どうしておもしろいのかという理由を全体にあらためて共通理解させる、という教師のはたらきかけによって、子どもたちがリズムについて感じたことの良さに自信をもって友だちに伝えることができていた。



図6：おもしろい重ね方の発表

5 おわりに

子どもたちには、思いをもって楽しみながら音楽づくりをしてほしいと願っている。その実現のために、本題材を子どもたちの実体験である生活科の町探検と関連させ、子どもたちと共通の体験をもつ教育実習生のつくった歌と出会わせたことは、子どもたちが「お店の人のためにつくった歌を聴いてほしい。」という願いをもつことにつながった。その願いは、題材を貫く創作意欲、もっとおもしろい歌にしたいという追求意欲になっていった。この実践で見られた子どもの姿から、どのような楽曲に出会わせるのか、その楽曲にどのように出会わせるのかという出会いの大切さを実感できたことは大きい。

また、本題材において有効であった手立てとしては、つくったリズムや出来上がった音楽の可視化が挙げられる。出会いの場面では、教育実習生がつくったリズムを既習の音符や休符を使って表し、目に見えるリズムカードの形にして、反復や問いと答えといったこれからつくっていく音楽の仕組みを示した歌の全体像を示した。これによって、自分たちが町探検で感じたことや思いをリズムや言葉で表現するにはどうしたらよいか、つくったリズムをどのようにして歌にするのかが子どもたちにも分かりやすくなり、抵抗感なくつくることができた。リズムづくりの場面では、子どもたち自身がつくったリズムをリズムカードにした。そのリズムカードを見せながらお互いのリズムを聴き合わせることで、似ているところや違うところを見つけて、その良さを感じることに役立った。リズムを重ねる場面では、リズムカードを目で見ただけで重なり方のおもしろさに気付いたり、リズムカードを目で追いながら聴くことでどのように重なっているかを感じ取ったりする手立てとなった。

今後、中学年での音楽づくりにおいては、リズムに加えて音の高さも取り入れていく。新たな要素を取り入れた時に、低学年のうちから段階を追って音楽づくりの楽しさを感じ取ってきたことや、今回実践した重なりのおもしろさを実感してきたことが、より深い音楽づくりの醍醐味を味わうことにつながっていくと考える。これからも、子どもたちがつくる音楽のよさや、追求する姿を引き出す題材づくりに努めていきたい。(文責 能海 麗美)



図7：おもしろい重ね方を見つけよう